

知求会ニュース

2024年05月

第90号

◎ 修士課程、入学おめでとうございます！

国際学研究科博士前期課程の後継である修士課程 地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにおいて修士（国際学）10名および多文化共生学プログラムにおいて修士（学術）10名が入学しました。

◎ 勅任教員紹介その28

李 亜姣国際学部助教

李亜姣先生が、4月1日付で着任されました。

氏名(英文)：李亜姣 (LI Yajiao)

専門：政治経済学 ジェンダー学 中国地域研究 中国近代ジェンダー史

前職：日本学術振興会外国人特別研究員

趣味：映画鑑賞 銭湯巡り

自己紹介：2024年の4月に着任しました。現在、心地よい緊張感を味わいながら、研究・教育生活を過ごしています。私の研究テーマは、主に二つあります。一つは、中国の民間貸借と女性の被負債問題です。言い換えれば、夫の闇金の債務に巻き込まれた女性たちのことを研究しています。一つは、中国の土地財政と「農嫁女問題」についてです。つまり、女性の土地権剥奪問題です。学部の授業では学生の皆さんに変わりつつあるグローバル経済を考察するアプローチを紹介しつつ、お互いに成長していきたいと願っています。

(2024年4月26日原稿受理)

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞（令和6年3月29日）3面に、「ネパール単語帳作成」「とちぎに夜間中学をつくる会」「旭中（宇都宮）や全国44校に配布」と題して、田巻松雄先生(宇都宮大学名誉教授)の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 福島民友新聞（令和6年4月10日）12面に、『郡山市制施行100周年 国際女性デーに郡山から発信！ 女性活躍応援 「こうりやま女性パワー100フォーラム」開催』のコーナーで「パネルディスカッション 女性の笑顔とパワーで創る未来～誰ひとり取り残さない世界を目指して～」と題して、菅野直和さん(国際学部国際社会学科第7期生)らの記事が掲載されました。

2. UUnow59号(令和6年4月20日)6-7頁に、「特集2 宇大ラーニングサポーター～同じ目線で支え合う心強い仲間たち」と題して、黒岩美穂さん(国際学部国際学科2年)らの記事が掲載されました。

◎新刊案内

1. 国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、**多文化公共圏センター年報** 第16号 156頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに 国際学部附属多文化公共圏センター長 **米山正文**

I 特集「多文化公共圏フォーラムを通じた社会への発信」

「多文化公共圏フォーラムについて」

米山正文

「『自主夜間中学について考える研修会』－関係者との出会いと『おわりに』－」

田巻松雄

「地域脱炭素と持続可能なエネルギーへの移行」

高橋若菜

「ホロコースト生存者の手記を読む授業－読書、グループディスカッション、全体に向けた口頭発表－」

榎野佳奈子

「国際平和と人権・人道法研究会」による公開フォーラム

藤井広重・Hagiya Corredo Magda Yukari・花塚ひとみ

「アフリカ論公開授業『ガーナにおける国際協力の現場』」 **荒木康充・阪本公美子**

「宇大生によるSDGs映画上映会『プラスチックの海』

－私たちが、加害者でも被害者でも居続けないために－」

高橋若菜

「ASEANコミュニティの構築：50th years of Japan-ASEAN relations ASEAN Community Building －Progress, Challenges, and Future Directions－」

Sugit Arjon

「原子力発電のリスクとコストを考える－基盤教育科目「3.11と学問の不確かさ」後期授業の報告－」

清水奈名子

「West meets East 西洋が東洋を見る目、伝統ある東洋－多文化公共圏実践演習(グローバル) B－」

松井貴子

II 投稿論文

“Children’s Wild Edible Food Preferences and Health Influences in Semiarid Tanzania: Preliminary Analysis with a Focus on Diarrhea and Constipation”

SAKAMOTO Kumiko, Michael CHIMOSA, HITOMI Toshiki, KIKUCHI Yukiko, Frank MBAGO, OHMORI Reiko

「チェコ俳人との交流」

松井貴子

「日本の思い出とキャリア形成－ペルーの若手クリエイター6人の抱負とアイデンティティ－」

スエヨシ・アナ

『田中正造とアジア』を再考する—追悼高際澄雄先生を偲んで— **重田康博**
「多様な外国人介護人材の「受け入れて育てる」課題—ヒヤリング調査による—考察—

鄭安君

「タンザニア7地域の市場調査—取り扱い食品からみる地域食性—」

武藤杏子・津田勝憲・加藤珠比・林将之・奥井鮎沙・大森玲子・阪本公美子

III 活動報告

- 1 HANDS 事業活動報告 **立花有希**
- 2 福島原発震災に関する研究フォーラム—「原発回帰」が進む社会と不可視化される事故被害— **清水奈名子・高橋若菜**
- 3 「国際平和と人権・人道法研究会」2023年度活動報告「国際人権人道法プロジェクト」「国際人権ワークショップ」「オランダ・フィールドワーク」実施報告書 **藤井広重・榊原彩加・菊地翔・西村実悠**
- 4 UU-TEA 新しい一歩—新規現地プロジェクト開始に向けて— **栗原俊輔・中村晴季・丸山浩平・銘苺実祐・溝渕悠乃**
- 5 UU3S プロジェクト 研究教育社会貢献の融合を通して地域脱炭素への持続可能な移行を探る **高橋若菜**
- 6 グローバルサウスとの共創「日本の国際協力」「タンザニア絵本プロジェクト」「在来知・食・健康」 **阪本公美子・内田啓子・菊地由起子**
- 7 アジア移民ハイウェイ—2023年度活動報告：サーベイ調査の実態— **松尾昌樹**
- 8 「多様な学び研究会」活動報告—研修会と多様な学び教室— **スエヨシアナ・田巻松雄**
- 9 宇都宮おもてなし隊の活動再開—アフター・コロナのインバウンド対応— **栗原俊輔・木村崇是・甘利友希・春日明大**
- 10 ワーキングペーパーシリーズ一覧

IV 関連資料

- 1 組織
- 2 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱
- 3 新聞記事

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第29号(2024年3月1日)

2023年度のHANDS事業を振り返って

国際学部准教授 **立花有希**

学生ボランティア感想

AMAUTA 夏休み宿題支援に参加して

国際学部国際学科 3年 **安藤美海**

令和 5 年度子ども国際理解サマースクール報告

サマースクールに参加して

国際学部国際学科 3年 **岡本心**

「多言語による高校進学ガイダンス」

多言語による高校進学ガイダンスに参加して

国際学部国際学科 3年 **伊藤咲希**

イヤー・エンド・パーティ 2023 に参加して

国際学部国際学科 4年 **リアボフ ダリア**

事務局だより

—令和 4 年度活動—

1. 外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）
第 1 回 2023 年 10 月 3 日（宇都宮大学 UU プラザにて開催）
第 2 回 2024 年 2 月 8 日（宇都宮大学 UU プラザにて開催）
2. 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
3. 真岡市 AMAUTA 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア夏期集団派遣：
7/26、8/2、8/9、8/16 の合計 4 回（参加延べ人数 33 名）
4. 子ども国際理解サマースクール（宇都宮市東生涯学習センターとの協働）：8 月 3 日
5. 多言語による高校進学ガイダンス（宇都宮大学主催）：10 月 21 日（大学会館にて開催）
6. 真岡市国際交流協会主催国際交流の集い「イヤー・エンド・パーティ」：12 月 10 日
7. ニュースレター『HANDS next』第 29 号の刊行：3 月
8. 栃木県における外国人生徒の進路状況調査：2 月～3 月

研究室訪問 60 第 9 号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。今回は KIM Ilju 先生の退職により、未掲載になります。

博士録 64 第 22 号から国際学部、国際学研究科に関する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「鉱山経営に伴う環境汚染と健康被害の不可視化の条件に関する研究」

匂坂 宏枝

<論文要旨>

古来より、鉱山から排出される有害物質は、鉱山の内部、局地、広域において環境汚染や健康被害を引き起こしてきた。鉱山内部では労働者がじん肺に罹患し、鉱山局地では煙害により山林や農作物は枯死し、川に流出した有害物質は鉱山広域で農作物の枯死や健康被害を招いた。このうち鉱山局地の健康被害は、少なからず不可視化されてきた。

本論では古河（現古河機械金属株式会社）が経営した鉱山のうち、栃木県にある足尾銅山と静岡県にある久根鉱山に注目し、誰がどのように鉱山局地の健康被害を不可視化させたのか、さらに鉱山局地はどういった性質を持つ場所なのかを分析、考察し、鉱山局地で健康被害が救済されない構造を明らかにすることを目的とした。

本論の分析、考察には、環境政治学および環境社会学の分析概念のいくつかを用いた。そのひとつが「政策プロセス」である。もしある被害が不可視化されて救済されないのであれば、「政策プロセス」が回らなかったか、回ったとしても被害が「フレーミング」された可能性がある。あるいは、救済が進まない状況は「イシューアテンションサイクル」によって説明も可能である。では、どういった場所において被害が不可視化されるのだろうか。この問いを考察する上で提起するのが、「疑似受益圏」という分析概念である。「疑似受益圏」がいつ形成されるのかという「時間的配列」を念頭におき、歴史的な経過から受益圏・受苦圏がいかに現れ、また消滅するか考察する。こうして鉱山局地と鉱山内部の健康被害が不可視化される構造を明らかにした。

研究方法は、公文書などの一次資料、書籍や論文などの二次資料に加え、フィールドワークで行ったインタビュー等の記録を用いた。加えて、インタビュー協力者が個人で所有している非公開資料も活用した。これらのデータを用いて、足尾銅山と久根鉱山で不可視化された健康被害を、住民、行政、企業の側面から分析し、だれがどのように健康被害を不可視化したのかを考察していった。

以上の方法によって明らかになったことは次の通りである。

まず、第3章と第4章で取り上げた鉱山局地の健康被害は、「フレーミング」によって「問題認識」もされないか、あるいは「問題認識」されても「イシューアテンションサイクル」の「社会構造的な壁の発覚」に至って「課題設定」には向かわず、「公衆の興味の低下」に至り、潜在化されていったことが明らかになった。被害者が被害発生地を離れることによってその記録は残されず、将来的に「課題設定」へ向かう機会も失ない、永続的に「不安定な状況の継続」となって被害は不可視化されることが明らかになった。

第5章と第6章で取り上げた鉱山内部の健康被害は、久根鉱山と足尾銅山においては、共通点と相違点が見出せた。歴史を辿ると、鉱山内部と鉱山山元は元来受苦圏であり、足尾銅山山元も久根鉱山山元も受益が次々に投入され疑似受益圏化していたことが明らかとなった。さらにピアソンの「時間的配列」で分析すると、利益の投入は鉱山山元に繰り返し行われ経路依存になっていた点も共通していた。ところが久根鉱山では、閉山によって利益が突然消滅すると、受苦が表出したのである。つまりじん肺罹患者の増加によって、

元来鉱山内部に存在していた受苦が出現したのである。一方足尾銅山では閉山しても利益の投入は継続しており、疑似受益圏であり続けているとした。

次に鉱山局地と鉱山内部を受苦圏とした場合、受益圏はどこであり、受苦圏の受苦にいかん作用したのかを検証した。この点について、第4章の栃木県による大気汚染測定が健康被害を明らかにすることではなかったという分析に着目した。つまり県の行政自体は受益圏に位置しているのであり、それゆえに足尾町の健康被害に無関心となり、被害を足尾の中に閉じ込めたのだとした。

以上の事例分析により、鉱山局地と鉱山内部の健康被害が救済されず不可視化した結論を以下のように導いた。

まず健康被害が不可視化される条件の一つ目は、受苦圏において、加害者である企業が健康被害からフレーミングを外して賠償をし、行政は何もせず、被害が不可視化されるケースがある。二つ目は、疑似受益圏となった鉱山山元において、企業も行政も被害に何も対応もせず、住民も自らの生活を守るために被害を潜在化させる。その潜在化が継続されて健康被害が不可視化するケースである。三つ目として、鉱山山元では、本来救済されるはずの鉱山内部の健康被害者がいたとしても、その存在が放置されるのである。そして受益圏の人々は受苦圏及び疑似受益圏に無関心であり続け、それゆえ受苦をそこに閉じ込め、被害の不可視化を助長、強化する。こうして鉱山局地の健康被害は救済されなかったのである。

本論が解明した鉱山局地の健康被害の不可視化は、経済を優先した政策の結果として、企業や行政ばかりでなく住民までもが被害の不可視化に関わっていく構造である。とすれば、経済活動が国際化している現在、この構造は日本の中だけでは収まらず、外国を含めた問題であると考えることができよう。いかに不可視化を食い止めるか。その構造の背景に受益圏の無関心や無責任があったならば、これを改め、受益圏から受苦圏や疑似受益圏に関心を寄せることが、問題の再発を防ぐ第一歩であり、今日問われているのである。

<今後の展開について>

足尾銅山には日本の近代化を推し進めた「光」と、足尾鉱毒事件などの環境汚染を引き起こした「影」の部分がある。この「影」の部分は、少なからず環境や住民生活を破壊してきた負の遺産であり、二度と繰り返してはならない歴史である。現在、日本が鉱石の多くを輸入に依存しているという事実があるのならば、足尾銅山の「光」だけでなくこの「影」も後世に、そして世界に向けて伝えていくべきである。

本研究にあたっては、足尾銅山の「影」の部分に焦点を当て記録するために、以下のような「語り継ぐ足尾」という資料を作成したきた。是非ご一読いただきたい。また今後この資料作成は継続し、足尾銅山の「影」を残し、より詳細な被害の不可視化の解明に向けて研究を進めていきたいと考えている。

・生沼勤、匂坂宏枝、高橋若菜『語り継ぐ足尾～生沼勤氏の語りとともに』多文化公共圏センター、2021年。<https://uuair.repo.nii.ac.jp/records/13843>

・星野茂、匂坂宏枝、赤上剛、加藤清次、高橋若菜『語り継ぐ足尾2～星野茂氏の松木村』多文化公共圏センター、2022年。

https://uuair.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=50&sort=controlnumber&search_type=2&q=964

・上岡健司・上岡良枝・中村真・高橋若菜・加藤清次・重田康博・針ヶ谷照夫・丁貴連・赤上剛『語り継ぐ足尾3～上岡健司氏の仲間・家族～』多文化公共圏センター、2023年。近日宇都宮大学図書館リポジトリ掲載予定。

<謝辞とコメント>

宇都宮大学の門を潜ってから16年が過ぎました。博士前期課程では松金公正先生に、博士後期課程では高橋若菜先生に、そのあいだに所属した福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクトの先生方に、深く感謝申し上げます。振り返れば国際学部の多くの先生方にお世話になりました。ありがとうございました。これからも地球環境と子どもたちの未来のために、できることをやっつけていこうと思っています。

(国際学研究科国際学研究専攻 第12期修了生・国際文化研究専攻 第10期修了生)
(2024年4月17日原稿受理)

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 35 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 23 知求会ニュース第41号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。

自薦・他薦を問いませんので、キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2024年の臯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

「多文化共生の地域づくりに奮闘中」

茨城大学非常勤講師
(公財) 茨城国際交流協会
地域日本語教育推進員
仙波 美哉子

2019年(平成31年)に国際学研究科博士前期課程国際交流研究専攻を修了しました。大学院入学前から、私は日本語教育の仕事に携わりながら、地域の国際交流や日本語支援にボランティアで関わっていました。地域のことに関わりながら外国人が自分の地域に増えつつある状況を知り、外国人が日本の社会で生きていくための日本語学習の場を、ボランティアがおこなう地域の日本語教室に任せている社会の現状に将来への不安を感じていました。宇都宮大学大学院を受けたのは「国際学」的な視野をもちながら、国内の多文化共生社会づくりを日本語教師の立場からもう少し突きつめたいと考えたからです。取り組んだ研究は「地域の日本語教室における「ビジターセッション」の研究」でした。ビジターセッションとは、言語教育で以前から行われてきた学習活動の一つです。言語学習が行われている教室に地域の方々をビジターとして招き、学習言語を使って交流を体験する活動です。地域の日本語教室でこの活動を取り入れたら、多文化共生社会づくりの重要な場所として活性化できると考えました。

2019年頃は、地域の日本語教室は外国人に日本語を教える場としてだけでなく、日本人も学びが得られる場所、交流の場など多面的な役割を持つ場所として活性化していこうという考え方が国の施策として広がり、「地域日本語教育」という分野が定着し始めた頃でした。そのような場所づくりに有効な活動の一つとして「ビジターセッション」という活動を取り上げ、有益性を検証したのです。

大学院修了後も日本語教育に携わっています。留学生、日本人学生、ビジネスパーソン、外国にルーツを持つ子どもたち、日本に来て子育てをがんばっているママさんたち、日本語ボランティアなど多様な人たちと関わりながら、地域づくりのための日本語教育について仲間たちと考え、実践する日々を送っています。

2019年に日本語教育推進法が施行され、この中で「国の責務等」が謳われたこともあり、日本語教育に取り組む行政機関が増えてきたように思います。私が関わっている茨城県地域日本語教育の体制づくり事業(文化庁採択)も6年目を迎えますが、昨年度から地域日本語教育に精通した日本語教師の養成や在住外国人を対象とした基礎日本語コースに取り組んでいます。多文化共生社会づくりに日本語教育の専門家が活躍し始めています。残念

なことに小中学校や高校などの教育機関では日本語教育の浸透の遅れや人材不足が伺えますが、今年4月に日本語教育機関認定法が施行され、国家資格としての「登録日本語教員」制度が創られたことにより、地域の日本語教育も専門家を巻き込んで、今後大きく変わっていくだろうと期待しています。

日本語教育の専門家と地域のボランティアがそれぞれの役割を楽しみながら、みんなが幸せに安心して暮らせる地域社会がより推進されることを願いつつ、これからも日本語教師として尽力していきたいと考えています。

最後に在学中にご教授いただいた先生方や研究室の皆さんに元気で過ごしていることをご報告するとともに、当時を振り返り感謝の意を伝えたいと思います。ありがとうございました。

(国際学研究科国際交流研究専攻 第13期修了生)

(2024年4月25日原稿受理)

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から年2回発行(4月1日、9月1日)の変更になりました。

EU支部だより

知求会ニュース第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の50号の内容は、1. イタリアの社会的協同組合障がい者雇用の促進 2. EU支部だより 「障がい者雇用」です。

編集者のひとりごと

●新年度が1カ月ほど過ぎました。やっと、新しいリズムに慣れつつあります。先日、1年間訪問できなかった群馬県の続日本100名城めぐりを3か所めぐりました。最初の週に、沼田城と名胡桃城を、翌週に岩櫃城を登城してきました。沼田市では水曜日が歴史資料館の休館日のために、岩櫃城の帰りに再訪しました。また、地元出身者の洋館などが移築された「大正ロマンエリア」や旧生方家住宅と資料館がある「沼田公園」も見学しました。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@gmail.com

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会